

## 自主シンポジウムのあゆみ

村松 弘子

日本特殊教育学会において「聴覚障害教育における日本語獲得、習得、運用に関する支援の実際を踏まえて」と題した自主シンポジウム（以下、シンポ）が始まったのは、2007年第45回大会（神戸）である。その前史にあたるのは、井坂行男先生が開かれていた「通級による指導」関連のシンポである。2002・2004・2005年と、本書の編者である高井、村松、藤本、白井が、聾学校の通級による指導や難聴学級での実践について話題提供をしたり、指定討論の任にあたったりした。これをきっかけに聴覚障害教育の課題を追求しておられる井坂・藤本両先生の姿勢に導かれて教育活動に取り組んできた。

2004年に発達障害者支援法が制定され、「特殊教育から特別支援教育に発展的に転換」する大きな変化があった。この頃の日本特殊教育学会での発表は、聴覚障害に関する発表が減って、発達障害に関する発表が著しく増えており「感覚器障害の課題はすでに出尽くした」と他の障害種の方々に思われていると感じる雰囲気であった。しかし私達にとっては、聴覚障害について追求したいことや議論したいことがまだ山のようにあり、以下のような課題に対して、更に焦点をあてた話題を広めたいとの思いから、本シンポを開催するという一歩を踏み出した。

聴覚障害教育がこれまで最も力を入れてきたことの一つが、幼稚部を中心とする言語獲得の部分にあたるもののように思う。シンポに関わって検討を深める中で、私達は言語の基礎的なものを身に付けた後、学童期から思春期を迎え、変わりゆく社会の中で求められている「生きる力」を伸ばすためには何が必要なのか、を重点に追求したくなった。シンポの中でもこの問題を追求しようとする実践の発表が相次ぐ。私達は追究したいと考えていたものに「言語運用」と名付け、2015年第53回大会（宮城）から「聴覚障害教育における言語運用力育成」と題したシンポへと発展させた。元となった「聴覚障害教育における日本語獲得、習得、運用に関する支援の実際を踏まえて」は、その後も井坂先生により継続されている。

聴覚障害教育に関わっている、あるいは、関わっていた私達は、エビデンスは、通過率は、という話よりも聴覚障害のある若者の姿が目浮かぶような話を聞くことを何よりの楽しみとしていた。そこで、話題提供も実践事例を主軸にして回数を重ねた。話題提供者を探し、関連の雑誌や全国で開かれる研修会、研究会に参加した方々から情報をもらい、同じ課題意識をもっていそうな方に交渉し、話題提供を依頼するという繰り返りで Good Practice が集成されていった。しかし、回を重ね報告が洗練されてくると、話題提供者を探すことが徐々に難しくなっていたのも事実である。優れた実践をしている方を探し当てても、異動の Spann が短く他の障害種に移ったので協力しかねると言われたこともあった。

話題提供の皆様には、個人情報に配慮し保護者や本人に了解を得た発表原稿を、ぎりぎりまで推敲していただいた。指定討論者は、報告内容を整理し思いもつかない高みから問いかけ、新たな展望を示してくださった。そのような場を共有し、至福の時間をもつことができたことは大きな喜びであった。

2019年第56回大会（大阪）終了後、10年にわたるシンポで得られた Good Practice を集成することが提案された。この時のメンバーを中心にした有志の会 LaPHICY で本書作成へのあゆみを踏みだし、現在に至ることができた。

なお、次に、「9歳の峠以降」「思春期」といった方向が少しずつ明確になってきた第47回大会（宇都宮）以降のシンポの一覧を掲載する。